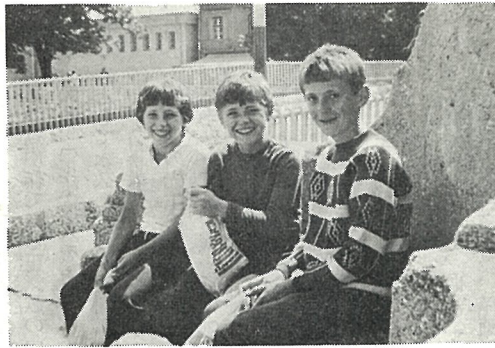


サライエヴォの一日

* ソ連・東欧を旅して *

清水 睦 夫



プリンチップ橋の上で

昨年（昭和）の夏、ソ連・東欧旅行のさい、「バルカンの赤い星」ユーゴスラヴィヤを訪れた。そして、かねてのプラン通り、そのうちの一日、第一次世界大戦の発火地点、サライエヴォに足を運んだ（八月十二日）。首都ベルグラード（白都）から西方200キロ。

分。もう人が沢山歩き、商店もシャッターを開き始めている。とにかくユーゴの人の早起きは驚くばかり。空港は人でいっぱい。悪天候でダイヤは混乱という。国際線のアナウンスは、英・露・仏語でやっているが、国内線はセルビヤ語だけ。とりあえず航空券を買

ベルグラード空港午後6時25分のJUT 732に乗り予定でJAT（ユーゴスラヴィヤ航空）事務所4時45分発空港バスに乗り込む。ホテルを4時に出る。『連邦議会』議事堂前広場を通ってJATまで徒歩30

う。片道185 Dinar（ディナール）＋国内航空税5 Dln.（しめて日本円は¥3,800）。何度聞いても、「天気が悪い、いつ出るかわからん。」と、立派な要員の係員がぶっきら棒にくり返す。ソ連はじめ社会主義国の「空の旅」は少しの悪天候でも欠航になる。アナウンスごとに聞き耳を立て、何度も中止しようかと思いつつも、2時間待つてようやく離陸の運びとなる。同乗の客はわずか十数名。飛行時間25分。サライエヴォ空港着8時50分。

いかにも南スラブの町らしい雰囲気を感じながらも、一方、四世紀間にわたるトルコ帝国支配の名残をとどめ、あちこちに百を数える回教寺院モスクや尖塔ミナレットがそびえ立つトルコイスラエル風の町サライエヴォは、秘められた歴史の町であり、それだけやはり遅延を辛抱しても訪問するに価する町であった。

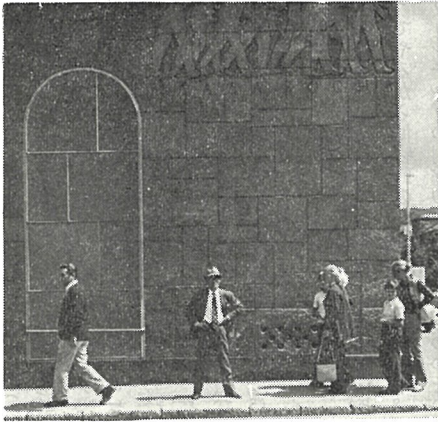
*

*

ボスニアヘルツェゴヴィナ共和国の首都であるこの町は、三方が峻い丘陵に囲まれた谷間にあり、空港から都心までバスで20分ばかり。JAT前で降車して帰りの便を予約

した後、早速に書店で市街地図を買う。どういうわけか、ソ連はじめポーランドでもブルガリアでも社会主義国家ではどの都市でも、地図といえはイラスト風のものが多い。もっとも旅行者にとってはこれで充分足りるのだが。

道行く人の服装からしてもそうだが、何となく町全体が地味で落ち着いている感じ。地図を頼りに繁華街「チトー元帥通り」を西に進んで、更に広大なスポーツ・センターのあ



プリンチップの靴痕に立つ筆者

るミリヤツカ川 Miliacka ほとりに出る。川幅 15 m ばかりのこの川は、思っていたより大きく、水量は少ないが黄褐色の泥水。さまざまなスタイルの美しい橋が 14 も架かり、川岸には高さ 1 m 余の石の壁堤がある。「とうとうサライエヴォに来たのだ！」と何度も呟く。興奮する胸を抑えつつ、何よりもこの町を訪れた一つの理由、第一次大戦勃発の歴史的地点——奥匈帝国皇太子狙撃地点を確認しようと思いを急がせた。

「あれだ、あれがラタイナー橋に違いない。」と、現在はプリンチップ橋と通称される一つの橋へと近づくと、「ヤポンスキ、ヤポンスキ」と 3 人のセルビアの少年が笑いかける。「ガボーリテ・リ・スループスコ・フルヴァトスキ？」（セルボークロアット語が話せるか）と聞いてくる。「ダ・ダ・ゴヴォリム・マール。ラズメーテ・リ・メク」（うん、少しだが話せる。私のいうことがわかりますか）。こうして会話が始まる。セルボークロアット語はロシア語と同じくスラヴ語であっても、また違った階調のリズム感があり、発音とくにイントネーションが難かしい。首をかしげて「今のはロシア語か」と聞かれて慌てさせら

れる。

小学校 6 年生というこの少年たちは明るく元気に溢れていた。学校は休みだがフットボール遊びからの帰りという。遠い遠いはずの「日本」の国名を知っているばかりか、ひと目みるなり、ヤポンスキ（日本人と呼んでは感激した。（日本の小学生でユーゴスラヴィヤのことについて知っているものがどれだけあるうか。しかし、日本について知っていることはと聞けば、「カラテ」、「ジュードー」、「ソニー」、「セイコー」、「トキーヨー」に限られている。「キョートウジシミズ」）と教えてやったのは痛快。写真を撮れ、という。十数枚撮った後、チュウインガムを噛みながら話す。ソ連のこともほどにはガムを珍らしがらない。「プリンチップ」Princip の名をいう時は誇らしげに熱をいれて話す。セルビア語はロシア語以上に巻き舌になって往々に唾がとぶ。

橋のたもとから筋向いに三階建の『若きボスニア“博物館” Muzej “Mlada Bosna”（通称『プリンチップ博物館』）がある。第一次大戦の導火線となった、所謂「サライエヴォ事件」は、この博物館前、当時は食品店「シラ

ア」の前で起きた。

アッペル・ケイとフランツ・ヨセフ街（現名「ユーゴスラヴィヤ人民軍隊」大通り）の交差点から七歩の所。犯人はガヴリロ・プリンチップ（GAVRILO PRINCEP；25. VII. 1894—28. IV. 1918 肺患で獄死。当年19歳。『大セルビア主義』を奉じる秘密結社『黒手組』のメンバー。高校3年生。貧農の家に生まれ、純真で熱烈な愛國的民族主義者であったが病弱。狙撃地点には、プリンチップの靴痕が歩道に彫り込んであるが、右足は真っ直ぐに、左足はやや左斜めに開いている。こどもたちが、写真をとってやるから博物館のわきに立て、という。プリンチップの射撃の構えを想像しつつその靴痕の上ののり（前写真真のように、想いを遠く60年前の、一九一四年六月二十八日、日曜日、午前十二時三十分の情景に馳せていた。

*

*

パーン、パーン、銃声が続けさまに二発起こった。奥洪帝国皇太子フランツ・フェルディナント大公夫妻一行を迎えて湧き立つ沿道の群衆は一瞬茫然として静まり返った。実は同じ日にこれで二度もの凶変である。事態が

何であるかを察した彼らはたちまち激昂して犯人に殺到する。犯人はピストルを我が胸に当てて自決しようとする。誰かがその腕を抑える。抜刀して躍りかかる侍従武官を先頭に、警官・群衆は四方から犯人に迫り、殴る、打つ、抑えつける、蹴る。犯人は血まみれになって転げ回る。だが、さすがに、混乱の際をねらって素早く服毒。でも効果なく、ついに不本意にも捕縛されてしまった。

道幅7mばかりの狭いフランツ・ヨセフ街を進行して来、行路変更のため一旦停止したその瞬間、皇太子夫妻座乗の第2号車めがけて発射されたのである。射程距離わずか2m足らず。一発は皇太子の頸部に、一発は皇太子妃の下腹部に命中。鮮血に染まる妃を抱きしめ、苦痛に顔をゆがめつつも、

„*Sophiet! Sophrerli! Sterbe nicht! Bleibe im Leben fuer unser Kinder!*“と声をしばって叫びつづけた皇太子の声が聞えてくるよう。15分間をおいて兩人とも絶命。奥ハプスブルグ王家の冷たい迫害の中に愛を結んだ彼らにとつてくしくもこの日、六月二十八日は結婚記念日（大公52歳、大公妃43歳であったという。ふと我にかえると、頭上にはバルカンの夏

の太陽がカンカンと照りつける。暑くて帽子を脱ぎたいぐらい。だがそうもいかぬ（?）。

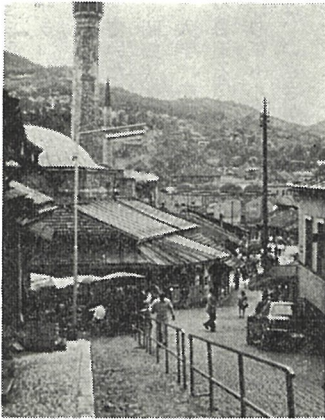
『博物館』に入りたいたいからといってこどもたちと別れる。「ヴェーリカ・フヴァーラ。カダ・チェモ・セ・ヴィデチ。ド・ヴジニャ」（大へん有難う。いつの日かまた。さようなら）。博物館といっても三階建の一階だけ。60平方mばかり。入館料は15 Din. というのに館長らしき白髪の品よい人物（今は Professor の肩書をもつという暗殺事件目撃者）が、『日本人か？ なら料金は要らん、よく来てくれました。』と握手を求めた。かつて私が書いた『ユーゴスラヴィヤ史』のコピーを贈呈した。館内正面壁にはプリンチップの大きな顔のレリーフ、横には『自由の志士プリンチップ』と銘刻。硝子ケース内の展示品は、事件を報じる当時の新聞・号外、黒手組メンバーの手記・写真、電報、若干の遺留品、武器類。事件に対する奥政府はじめヨーロッパ諸国での反響を察するに足る若干の記録、資料など。しかし、世界的破局Ⅱ世界大戦の原因となった歴史的事件の資料としては、余りにも不十分で断片的である。もっとも、館長の説明では、首都ベルグラードの国立資料図書館には

歴大量の裁判関係その他の記録が保管されていたが、今次大戦時、ドイツ軍の空爆でことごとく灰燼に帰したという。

*

*

館を出て徒歩15分ばかりでバシユ＝チャルシャ市場 *Bascharja* に着く。その風景はまさにイスラム＝アラブの世界である。これが社会主義の国、スラヴの国かと何度か疑う。行きかう人びとはトルコ帽を被り、トルコ風のチョッキに、裾をくつたズボンをはいている。回教寺院に囲まれた広場には、壺、皮・銅・金銀細工、寶石、絨緞、織物から刺繡



バシユ＝チャルシャ市場付近

もの、あらゆる民芸品を含んだの品物を売る小露店が立ち並ぶ。客呼ぶ声はトルコ語とセルボ＝クロアート語の違いはあっても、その雰囲気はまさにイスタンブールの大バザールや、エジプト・バザールのそれと全く同じ。セルビア風民芸品若干を買う。値切ればまけてくれる不思議な社会主義国家ユーゴスラヴィヤ、共產主義の国であって、「共產圏」でない国の顔をそこにかいま見た。私は、更にかつての満洲での光景をも思い出していた。

やや小高いせいか、背後のディナル・アルプスの山々の中腹から麓にかけて赤いスレート瓦の民家が一面に建ち、その間にモスクやミナレットの林立するのが一望できる。イスタンブールのアヤ・ソフィヤ寺院に似せて造ったベゴヴァ＝ジュミア回教寺院（十六世紀）がひととき目立つ。とあるカトリック教会前の公園広場では近隣の個人農が持ち込んだ野菜・果物・花の市が立ち、明るい陽気な雰囲気の中でやりとりが交わされている。「バルカンの黒い土」がはぐくむ農作物は豊かだ。

ミリヤツカ川に沿ってアッペル・ケイを走る電車に乗る。後部乗車口には日本の銭湯の

番台を思い出させるように、車掌が座席して切符を売る。変な感じ。どこの国でも車掌は立っているか、ぶら下がっているのが普通なのに。ラテン風のカフェテリアで食事をする。ソ連のレストランよりは迅速で感じがよい。街のどこどこに身長計と体重計とを置いて、じいさんが一回 2 ~ 3 Din. をとる珍商売。煙草をふかした靴磨き少年が客を呼ぶ。粗末で地味な服装をしてはいるが、若い男女が手を取り組んで陽気に笑いさざめき通って行く。

「チトー元帥通り」に面した、とある本屋に入る。ユーゴスラヴィヤでは外貨両替の際他の東欧諸国のようなボナス制度がない。そのためか US \$ 1.00 は 15.27 Dinar の交換レートは高く思えるが、本だけはこの国は安い。本棚にゲオルギエ・オストロゴルスキ教授（ベルグラード大学）の 6 巻全集——『ビザンティオン史』を発見したとき、どんなに胸が高なったことか。セルビア語でのこの大巻がわずかに 570 Din.。ビザンツ史研究者には垂涎の書であるのに。

かつて長らく、ボスニア地方での考古学研究の『年報』——『GLASNIK』を送って

れた「サライエヴォ地方博物館」Zemaljsk
Muzej u Sarajevuを訪ねた。この館長が
サライエヴォ事件生き残りの勇士ボボヴィチ
博士 Cveto D. Popovicであることも知
っていたから。しかし、残念にして時間が遅
く閉館。仕方なく地図を頼りに「サライエ
ヴォ大学」を探しあぐねたがわからぬ。やがて
夕暮迫るミリヤツカ川畔に、郵便局と並んだ
余りにも小さな建物の大学を見出したとき
は、いささか期待外れの感じがしないでもな
かった。ユーゴの最高学府『ベルグラード大
学』がこれまた格式張らぬ目立たぬ存在であ
ったのとも思い併せ、建物ばかり立派な日本
の大学を改めて考えさせられた。チトー自身
の命によりベルグラード市街では一枚として
見かけられなくなった「偉大な指導者」チト
ー大統領の写真が、隣の郵便局正面玄関に、
大きく元師服で掲げてあったのは印象深い。

*

*

想えば、民族の十字路とよばれたバルカン
の国ぐにの歴史は、まさに「呪われた流血の
歴史」であった。葛藤と妥協、弾圧と抵抗。
侵略せる外国支配者の羈絆を脱して民族の独

立をかちとるための反抗、死闘。こうしてバ
ルカンの土は彼らの熱き血によって染められ
た。そうした苦闘の途を歩き、しかも、

七つの国境を接する六つの共和国(スロヴ
ニア、クロアチア、ボスニア―ヘルツェゴヴィ
ナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア)
五つの民族(セルビヤ人、クロアチア人、スロ
ヴェニア人、マケドニヤ人、モンテネグロ人)
四つの言語(セルビヤ語、クロアチア語、スロ
ヴェニア語、マケドニヤ語)
三つの宗教(ギリシヤ正教、カトリック教、イ
スラム―回教)

二つの文字(キリール文字、ラテン文字)
そして、一つの国——「ユーゴスラヴィヤ社会
主義連邦共和国」という多民族複合文化の複
雑な国情をもつこの国の行方を思い、薄暮の
田舎町サライエヴォで、ひとり思案に耽れる
のであった。

奥洪帝国に抗したプリンチップの愛国精神
は、ナチスに抵抗した「バルチザン精神」で
あり、それは同時に「社会主義の祖国」——
ソ連に抵抗し、スターリンとの闘争に建国の
成否を賭けて独自の社会主義の道を歩んだチ
トーの精神——チトーイズムであったのでは
あるまいか、と。ユーゴ共産主義者同盟(共産

党の機関誌『ボルバ』《Borba》が「闘争」
を意味するのは故あるところであらう。

しかし今日、チトー大統領の高齢化(83歳)
はバルカンの将来を不穏なものにしつつあ
る。アラブとの関係を深めるソ連にとってバ
ルカンの戦略的重要性は倍加したし、アルバ
ニアの海軍基地の回復、ルーマニア黒海沿岸
の「ドブルジャ回廊」獲得をねらうソ連の野
心と脅威は、ユーゴを含むバルカン三国の運
命を大きく左右する、という。第2のサラ
イエヴォ事件が起こらないと誰が保証し得よ
う。チトー去りし後のユーゴの道は、東か、
西か、それとも非同盟中立の名誉ある路線を
歩みつづけるか。私はユーゴをこよなく愛す
るが故に、チトー以後のこの国が気がかりと
なる。

(香里中高教諭・世界史)

*

*